

第 14 号

発行

小松同窓会本部

〒923 小松市丸内町二ノ丸15

石川県立小松高等学校内

同窓会報編集委員会

印刷 北嶺印刷株式会社



生きることは
人生を定義する
ことに 勝る
ウィリアムズジェイムス

『天守台』と宮崎榮さん

井口哲郎

『天守台』は、第十四号発行に至った。その第一回編集会議が開かれたのは、宮崎榮さんの葬儀の夜の夜であった。集まった委員一同は、なにか因縁めいたものを感じながら、宮崎さんのご冥福を祈った。

『天守台』の第一号が発行されたのは、平成三年の一月で、「小松同窓会会報」として、その年の小松同窓会新年会に初お目見えした。編集委員長宮崎さんのあの時のうれしそうな顔は、今も私の臉のうらに残っている。

宮崎さんにとって、同窓会会報の発行は、長い間の念願であった。その企図を宮崎さんから直接お聞きしたのは、私が、小松高校で同窓会関係の事務分掌にかかわっていたころであるから、もう十年以上も前になる。

そのころ、宮崎さんは、ご自分のクラス（中学33回）の「クラス会通信 33」が発行される度毎に、私のもとにも届けてくださいました。自転車であって、「ちょっとそこまで来たから寄ってみた」というのが、いつも挨拶代わりだった。それから、会報発行にまつわる話、会員の動静などを語り、最後に「みんなとても喜んでくれるんですよ。だからねえ、小松同窓会でも会報を作れんかねえ。」というのが決まり文句であった。

私は、その時、その話をそんなに強く受け止めていなかった。むしろ、クラス会という小人数だからこそ原稿や配布など、徹底した広報活動ができる、それを小松同窓会に置き換えると、いろいろな問題点が先に頭に浮かんでくるので、その場合は、あいまに、あいつちを打つような状態ですませていた。

その後、小松高校野球部の甲子園出場や創立九十周年記念大会を経て、母校に對する卒業生の熱い思いを肌で感じ取った宮崎さんは、会報の効用を確信して各方面に働きかけ、同窓会の常任委員会への提案までにこぎつけたのであった。

同窓会総会での決議を待って、会報編集委員会が結成された。会報の体裁、編集方針・内容などすべてが宮崎さんの発案になるものだったと聞いている。

第一号の発行に際して、宮崎さんからネーミングの相談を受けた。私は、できるだけ会報への、会員の参加を呼びかける意味で、当分「小松同窓会会報」として発行し、



折りを見て会員から公募する形をとったかどうか、と応じた。宮崎さんは、それ

れもいい考えたを受け入れてくださったが、どうやら頭の中には、九十周年記念事業で造成された「青雲の小径」にちな

んだ会報名があったようである。ところが、折りも折り、PTAでも会報名が「PTAだより」ではあいそむなという話が出て、当時の会長那谷忠雄さん（高校14回）の発案で「青雲の小径」と改称してしまった。さっそく宮崎さんから「いい名前をPTAに取られてしまったがいね」と、クレームをつけられる始末であった。

第八号から、会員の意見を集約して『天守台』と改称、「小松同窓会会報」という名称は、添え書きと各頁の上欄外に残した。私は宮崎さんに「天守台は、卒業生にとって最も印象深いものだし、そこにとっしり落ち着いて、青雲の小径を歩む後輩たちを見守ってやるというふうにかえるのはどうでしょう」といったが、うん、とうなづかれただけであった。

宮崎さんには、個人的にも親しくしていただいた。父親同士が、旧小松高等学校の職員室で机を並べていたところとや、私の母が宮崎さんの幼稚園時の担任であったせいもある。先年なくなった母の病床を何度も見舞ってくださったし、葬儀には、弔辞はいやだからと、「別れのことば」を手向けてくださった。

本号より、同窓会本部から「宮崎さんの後を継げ」とのお示しで、僭越ながらお受けしたものの、偉大なる編集委員長の後には、ただ後塵を拝する以外に、今のところ何の手立てもない。会員の皆さんのご支援を待つばかりである。

(高校3回)

徳田八十吉さんの人間国宝認定について思うこと

石川県立美術館長

嶋崎 丞

陶芸家であり、小松同窓会長でもある徳田八十吉さんが、五月二十三日の文化財保護審議会で、重要無形文化財保持者、一般にいわれる人間国宝に認定された。小松地区から人間国宝はもちろん初めてである、心からお慶び申し上げたいと思う。

小松の徳田家といえば、昭和・現代における九谷焼の代名詞ともなっている程の名門で、当代の八十吉さんは今更いうまでもなくその三代目である。

初代の徳田八十吉（一八七三～一九五六）は、昭和二十八年文化財保護委員会（今日の文化庁）が、文化財保護法で、初めて無形文化財の制度としての「助成の措置を講ずべき無形文化財」の制度を施行した際に、選定された人であった。初代八十吉は、独自の釉薬である濃厚釉、碧明釉、欽郎釉を中心とする独特の色絵磁器の世界を創出し、古九谷や、それに続く吉田屋窯の

作品にも優る逸品として、高く評価されていた。こうした優れた色絵技術の保持者である初代の徳田八十吉の晩年に、当代八十吉さんは、九谷焼の上絵の具の調査法や、絵付けの技術を直接学んでいる。

初代八十吉が、昭和三十一年に没してからは、当代八十吉さんは、父である二代八十吉（一九〇七～）の仕事を手伝いながら、制作に励むことになった。二代八十吉は、初代八十吉や、色絵磁器研究のために九谷へやってきた富本憲吉（一八八六～一九六三）などに師事し、釉薬の調整や絵付けの表現技法に、現代の創造的精神を盛り込み、日展を舞台に活躍した作家であった。最近では体調を崩し、現役からは退いているが、初代八十吉から学んだ古九谷を中心とする五彩の絵付け技法においても、九谷を代表する作家であり、他の追隨を許さぬものを持っていた。そして絵の具の調査や改良にも研究熱心で、絵付け表現に新しい世界を拓いた現代九谷改革運動のリーダーでもあった。

こうした祖父や父であり、優れた指導者であった二人に

直接指導をうけ、名門に育った当代八十吉さんは、これら二人の師の世界を乗り越えての作家活動としての責務が、重くのしかかったであろうことは、誰しもが想像するところである。

八十吉さんが、陶芸作家として世の注目を浴びるようになったのは、正彦さん時代の昭和四十六年第十八回日本伝統工芸展で、NHK会長賞を受賞した「彩釉鉢」からであるように思う。それ以前の八十吉さんの作品については、地元石川県の現代美術展や、一水会陶芸部会展、朝日陶芸展などの出品や活躍があるにもかかわらず、関係者以外には一般にはあまり知られていないように思われる。

NHK会長賞の受賞となったと見ることが出来る。今日でもそうであるが、九谷の伝統工芸展の出品作品は、色絵の文様や小紋を中心とした世界であるが、そうしたなかにあって色釉の濃淡のみで、新鮮な感覚を表現した八十吉さんの「彩釉」の仕事は、九谷の世界のみならず、日本伝統工芸展に新風を吹きこんだ感があった。

こうした八十吉さんの彩釉の世界の確立には、一つの大きな起因があったように思われる。彩釉の仕事は、素地の全面を色釉でうめつくし、色釉の濃淡の微妙な変化での美しさを表現したものであるが、素地の全面を色絵の具でうめつくすやり方は、古九谷青手身の技法である。八十吉さん自身が語っておられるように、八十吉さんが古九谷に関心を持つようになったのは昭和四十年代前半頃からであり、その頃から独自の技法である彩釉の世界が展開しているところをみると、その基礎には青手古九谷の世界があるように思われる。

初代や二代の八十吉の仕事は、どちらかといえば古陶磁

の優れた色絵の技法をそのまま踏襲したものが中心をなしているが、八十吉さんの彩釉の技法は、そうした古陶磁の優れた表現技法において、濃淡のみで現代的に生かすことに成功し、色釉の文様を染しむという、わが国の伝統的な色絵の陶芸界に確信をもたらしたということが出来る。

こうした八十吉さんの現代的、革新的ともいえる技法が世の評価を得て以来二十数年を経た今日、現代の九谷陶芸界では、一つの作風技法として定着してくるようになり、多くの若い作家たちが、八十吉さんの指導よろしきを得て見事に成長し、活躍の場を広げている。

今回の八十吉さんの人間国宝の認定は、八十吉さん自身の強い個性で表現された革新的ともいえる彩釉の技法が、高く評価された数少ないケースであるだけに、八十吉さん自身にとっても喜びひとしおと思われる。今後益々ご健勝でご活躍されますよう心から祈念申しあげます次第である。

河童 ホームレスの頃

森田 隆志

「濁れる梯川に飛沫を上げて
原始的設備に苦しみながらも、
往年の覇業を夢みて練習に精
進した我が水泳部の過去一カ



とき 昭和11年11月 ところ 石田橋々畔
左端は部長伊勢修二先生、平泳で北陸を制覇したI氏 前述のD氏 後年市議会議長
をつとめたY氏 ほかに若手の面々 六十年前の俤である。

年の成績を顧みるに、それは
あまりにもみじめなものであ
った。桜と共に幾多の先輩達を
送った水泳部選手達の悩みは
一層その深刻さを増した。即
ち、

一、新学期劈頭に特殊事情の

ため、退部の止むなきに至
た者が多かったこと。

一、橋梁改修工事その他の事
情により、設備の完全を望ま
れず、充分な練習場がでなかつ
たこと。(中略)

遂に時到来。それは金字も
て飾るべき皇紀二千六百年、
教育勅語頒布五十周年、本校
創立四十周年及び東京オリン
ピック開催の総合記念事業と
して競泳池設置の件が可決さ
れ、すでに具体化されたこと
である。

幸なる哉水泳部!!今や忍従
の時に非ず(以下省略)

これは白峰第五十六号に載
せた各部回顧録の一節である。
(註、競泳池とはプールのこ
と。この設置は結局小松高校
になってからの昭和二十五年
に漸く完成した。)

当時は石田橋上流に杭を立
て簀子の板を水平に打ちつけ
てスタート台とし、垂直に固
定してゴールやターンに使用
した。上流で工事があれば濁
水、雨天が続けば忽ち水位上
昇、集中豪雨ともなれば根こ
そぎ流失等々、河童の練習日
は著しく制限され陸に上が
っている日が多かった。

その水泳部にD君(旧姓N)

が居た。彼は同窓会発足と
もに理事として活躍していた
が九十周年が近づいた頃体調
を崩した。依頼によりピンチ
ヒッターとして名簿の再調査、
校正など手伝い、引き続き隔
年開催のクラス会の幹事役や
会費要員となり、代役に徹し
て十年。ところが昨年七月彼
は忽然として幽明界を異にし
たためはからずも黒子役が表
に出ることになった。すでに
耐用年数を超えた老兵だが何
とか消えないで百周年記念行
事の手伝いができればと思う
今日此の頃である。(中学34回)

東京で活躍している
小松中学校卒業生達

山田 哲

船乗りをやめてしかたなく
東京で仕事をされるようになって
三十三年になります。すこ
し余裕ができて小松中学校同
窓会に出たり、双松会には毎
回できるようにしています。そ
のなかで中学校卒業生同士が
この広い東京で偶然な出会い
を聞いたり、自分で体験した
ことを披露します。

やや古い話ですが、二十年
前、私の娘と息子が東京品川
の伊藤中学校の三年と一年の

時の校長が、中学五年先輩の
大垣方孝氏でした。そのこと
を知ったのは中学校の同窓会
でもらった名簿に大垣方孝伊
藤中学校とあってはじめて知
たわけです。早速学校へ行き
お会いしました。校長室でお
伺いした話をまず紹介します。

大垣氏が当校に着任時、前
任校長のときのPTAの会長
を紹介されたわけです。勿論
名前を聞いて紹介をうけたの
ですがさほど気にとめず話が
すすんだそうです。そうこう
話すうちにこの人は昔知って
いた人ではないか、という気
がしてきました、もういちど名
前を聞きなおしたところ二人
は突然立ち上がりしっかりと
握手したそうです。二人は小
松中学の同期生で、卒業来初
めの再会だったので。P
T A会長の名は源明さんとい
って品川で泌尿器科の先生をし
ており、たまたまその時期に
子供さんが伊藤中学校に在
校中でPTA会長に選ばれてい
たようです。

私の話。商売から大学生の
バイトを常に数人利用してお
ります。五、六年前にほんの
二年くらいの短い期間、坂口
君という鹿兒島出身の子が友

人の紹介で、日曜だけのバイトに来ていました。アメリカの日本校テンブル大学に在学中でした。アメリカの大学は卒業が難しいとかで卒業時期には姿を見せなくなり、そのままになっていました。約五年後の昨年十月、坂口君達といっしょにバイトをしていた同世代の落合君の結婚の仲人を私がしました。落合君はバイト先で知り合っただけの坂口君を招待し、そこで私も久しぶりに坂口君に会い名刺をもらいました。式場では気がつかなかったのですが、帰って見た名刺には国栄建業(株)とあります。この会社の名は

以前から良く知っており、社長は中島柳近氏のはずです。小松中学も湊小学校でも一級先輩で毎朝一緒に寺井駅まで通った仲です。私達が二年の時、小松まで二里の道を歩かされましたが、それも一緒に通ったものでした。東京でも

中学校の同窓会で一二度会っていましたが学生の就職まで依頼したことはなく坂口君の国栄建業への就職は全くの偶然でした。

早速中島氏に電話しましたところ、間違いなく中島氏の

会社でしたし、二人とも驚いていたことはいまでもありません。この国栄建業(株)は売り住宅を売買する会社で、

大学卒業者を入社させるいじょうはそこそこやっているとは思いますが、毎年大卒者を幾人も入社させるほどの会社ではないはずで、私の会社はといえば個人企業に毛のはえたような会社です。

あまりの偶然さに驚くとともに、人との付き合いの大事さを痛感した次第です。

嗚呼 嶋崎均君

(中学44回)

嶋崎君は去る五月九日それこそ突如として世を去った。まさに無常とはこのことか。

痛恨の極みであった。彼は旧中学三十七回卒の同級でしたが、当時学業も人柄も優れていたことは言うまでもないが、所謂ガリ勉のカチ／＼ではなかった。大きな身体で茫洋として温かな感じで皆から親しまれていた愛称「嶋崎のタマ」ではあった。世に出て参議院議員或いは法務大臣として国政の舞台で大いに活躍するなどは誰しも夢想だに出来な

かった。本人の話では高等学校時代から猛烈に勉強し出したと云う。東大在学中に高文をパスして大蔵省キャリア組として入省したのであるから

並々の学生ではなかったことは領かれる。性格は極めて実直勤勉で、信望厚い有能政治家として国会活動を休んだ量も遺憾なく発揮したものである。彼は常に国会を休んだこともなく真面目にとめて

いることが唯一の取り柄だと謙遜していたが、例えば議会運営委員長の難かしい要職を

二〜三回続けて立派に果たし高い評価を得ているのを見ても分かる。また彼には真面目で嘘をつけず人に阿わぬ性格があつて掛け引きの多い政治の世界では損をしたこともあつたようだが、その顕著な例として自民党が消費税導入を公約に戦った選挙戦に於て、この件に余り触れたがらない候補者の多いムードの中で彼は

真正面に消費税に取り組み、その重要性を強く訴え続けたことがあつた。この結果当然疑い無しの彼が僅少の差で敗れたと云う苦い経験をなめている。本来彼は経済とか財政に堪能で強く、国家の財政危

機を憂いこの政治課題に心血を注いで活躍して来た。その彼が珍しく実家のホテルであった業界の総会の場で、マイクを持ったまゝ倒れ言葉もなく翌朝病院で大往生を遂げたのである。死ぬまで人生に真面目な彼の生きざまは強く我々の心の琴線に触れる思いだ。

追慕は盡きぬが、畏敬の友嶋崎均君を失ったことを心から悲しむ。拙い追悼の言葉をしたため、ご冥福をお祈りします。 合掌 (中学37回)

継続は力なり

国民文学同人
坪野 芳子

冬の夕焼空は美しい。西空の靄の中に真赤な日輪がぼかり浮んでいる。歌に表現出来たらなあ」と思う間もなく半円になり忽ち沈んでしまつた。このような美しいものを

見た感動、また辛く悲しい時、嬉しい時、自分の感情を思い出すこと

のままに表現出来たらどんなに素晴らしいだろうと短歌を始めたのが四十年前のことです。人それぞれ選択によって趣味は異なりますが作歌している心まで老いず精神の自在に生きる事実を知り、それを大いに活かして自らが助かっていると思えます。常に緊張感を持って生きていくということ、また言葉を大切に選んで表現し推敲することによって集中力が養われ、もっと知ろうとする意欲知識欲も湧き

毎日のこの繰返しによって頭の老化を防ぐことが出来、またストレス解消にもなっています。歌の道は深く敷しいけれど命ある限り頑張りたいと思っております。昭和六十二年に第一歌集「慕蘭」を出版しました。

また季を違えずそれぞれの彩鮮やかに咲く草花を細かく見ながら写生すること

楽しさを覚えしました。何もかも忘れて画筆を運ぶ数時間は何か些細なことでも新しい事に挑戦しようとするのが若さに繋がるのではないでしょう



第一歌集「慕蘭」出版記念会
(宮中御歌会選者千代蘭一先生を迎へて)



か。静よりも動に関心を持
た若い頃よりも静に甘んじ
るの始まりかと思いがら頑
張っているこの頃です。

重なる紅の下飾るなし花と
友らの輪に染まりゆく

燠の辺に温まるがごと悲しみ
を忘れて友の声につつまる

遙かなる洲に遊べるは水鳥か
亡き幼児か霧の過ぎつつ

柀の棘ぬきくるる掌にゆだね
分ち合ひこし温みと思ふ

泣く児抱く吾を励ます何鳥か
雪の梢にあかときの音

(県女28回)

すりへった廊下

木崎 馨山

本年早春、久しぶりに小松
高校を訪ねることになった。

四月二十九日、私の入会して
いる国際ロータリー、二六一

一地区協議会を、小松市公会
堂及び小松市役所エントラン

スホール等を使用し実施する
予定であり、私は、その会場

の世話係を命ぜられていた。

小松市公会堂、市役所エン
トランスホールを使用しても

なお、分科会の会場が不足し
ていたので、同窓会館を借り
られないかどうか打診のため

であった。

小松市に在住していながら
滅多に訪れることのない母校

を訪ね、第十六回卒業の曾田
孝志さんとともに、清水事務

長にお目にかかり、同窓会館
使用の快諾をいただいた。

ふと正門右手の木立のなか
にある木造の記念会館や旧講

堂を眺めるにつけ、懐かしさ
がこみあげてくる。

あのささくれだった木造の
サッシ、漆のように光った階

段の手摺り、そしてすりへっ
た廊下のフローリング、当時

の記憶が蘇って入って見たい
衝動を感じたが、扉は閉めら
れていた。

私達、高校十二回卒業の時
代は、日本の高度成長の始ま

りであり、多くの公共建造物
もスクラップ・アンド・ビル

ドされた。

木造の校舎が次々と鉄筋コ
ンクリートの箱に建てかえら

れ、無味乾燥なモルタルを塗
られた校舎に変質していった。

産業を支える多くの人材育成
のためには、マスプロ的発想

も必要であったし、全てにゆ
とりは不要であった。

それ故、教育の施設は、自
然の温もりを必要としなくなっ

てしまっていた。パブル経済

の崩壊や成金主義の宴の後で、
その反省かどうかわからない

が、最近とても街並にあった
学校建造物が現れはじめた。

風の噂に伝え聞くところに
よれば、小松高校も改築期に

あるとか？ もし改築がある
とすれば、廊下がすりへって

も味いを感じさせるような、
また森の樹木と似合った建物

であればなんて望んでいるの
は私一人だけであろうか。

(高校12回)

俳句

春に拾ふ

木下 純子

触れ合える影みなまろぎ

春野かな

摘草の籠にふくらむ日の匂い

白山をすえて春田の鍬光る

椿みな土に還るや海の音

茜染む印波を分かち船帰る

(県女33回)

木の芽峠越え

山口富美子

蓮如上人五百回御遠忌法要

を一年後に控えた、四月二十
一日早朝三時にバスで出発し

た私達は、ご縁床しき蓮如上

人をお慕いして、蓮如上人御
影吉崎御下向道中の中でたっ

た一ヶ所昔のままに残されて
いるという木の芽峠の供奉の

儀に参加させて頂きました。

六時に敦賀市新保町意力寺
に到着。出発準備中のお櫃に

合掌礼拝して、総勢六十余名
が木の芽峠へと向かいました。

宰領さんの背負われた真っ赤
な打敷に包まれたお櫃、その

後に続いて細い山道を登り始
める。昨夜来の雨もからりと

晴れて鶯の鳴き声も聞こえて
くる。清々しい、山吹、辛夷、

可憐な山野草の花が目に入っ
てくる。「木の芽峠越えは毎

年大抵お天気が良い」とお供
奉人の言葉。道はだんだん険

しく右を見れば急な山、左を
見れば断崖、一歩踏み誤れば

大変な事故が予想されそうな
細い一本道である。

背負わせて頂きたいとい
う私達の願いも宰領様に許さ

れまして、次から次と交替に
背負わせて頂く。いよいよ

私の番が来た。合掌、蓮如さ
んを背中に負わせてもらう。

しっかりとお櫃を抱える。感
動に胸がつまる。転ばないよ

そう重くはない。蓮如上人の

お文が頭を過ぎる。背中から
声なき声が聞こえて来る。南

無阿弥陀物………勿体無い、
有難い、背負うた者のみが味

わえる尊いご縁でありました。

約一時間程で標高六二八メー
トルの頂上峠茶屋に到着する。

心地よく汗した体に、温かい
お茶とお菓子を、ご馳走になる。

暫く休憩のあと下りの坂道を
今庄町二ツ屋の谷口様宅に無

事九時頃に到着した。

今年には三百二十四回目とか、
雪も多く雨風の都市もあった

であろう。天長七年(八三〇)
の開道以来、親鸞さんも蓮如

さんも一向一揆の人々もこの
細い獣道を歩かれたのだと思

うと………そして今私もこの足
で歩いている。歴史の重みが

ずっしりと感じられたことで
した。

蓮如上人五百回御遠忌を機
に上人の御教えに学び、その

お心を受け、共に新たな歩み
を踏み出すことを誓いたいも

のです。合掌(市女19回)

祖父の遺訓

上田 邦子

小松高校同窓の石川栄子さ
んから「七回生集合！邦ちゃ

んは兄君の徳田八十吉さんが会長だから、金沢からぜひ来るように。」とお電話をいただいたおかげで、今年はずばらしい本部新年会に出席し、一年生時担任の橋本先生はじめ、故郷の大勢の先輩後輩にお会いしました、同級の八田幹也氏の表彰のお祝いも出来て、とてもうれしゅうございまして。

その折にいただいた「天守台」に、祖父のお話があり、私も記させていただきたく思いました。祖父の初代八十吉は美しい九谷の五彩を再現したことで、日本国無形文化財指定をいただいた上絵付けの名人でしたが、二代、三代の八十吉や朝倉五十吉氏等の大勢の御弟子を育てる名人でもあったように思います。

初代・九谷無造訓

一凡そ人の道なきはくらし
一誠まことこそ世を渡る
一孝弟・誠・仁・勇・礼
一人の恩情はゆかり
一徳田八十吉氏新訓持し
大事のこころなり

昭和十一年二月一日

徳田八十吉氏新訓持し
大事のこころなり

祖父は四十才代までに、実子を五人全員亡くするという筆舌に尽くし難い悲しみを受けてから、毎朝夕、佛壇に読経して祈ることを四十年間続けていました。その祈りと、

神佛の御慈悲の中から、その後何事も生まれてきたのでしょう！六十才の時に兄正彦、四年後に私が生まれたのですが、祖父は十八才で亡くなった実娘の代わりと思ったのか、私は二才から成人まで、祖父の部屋で寝起きを共にすることとなり、本当に平和で幸せな十八年間でした。小さい頃は銭湯で丁寧に洗ってもらい、字を習い、宿題の工作はいと楽しく合作し疎開は一緒に八幡の五十吉邸へ。終戦後初のお旅子供歌舞伎で光秀役の時

(中二)は、前庭の大切な松の枝を切って二階から皆に私の芝居を見せ、御祝儀返しに蛙の盆七十ヶを創ってくれました。高校時代にピアノに熱中していた私を一番理解してくれたのも祖父でした。私も毎朝驚の餌を作り、夕方は菊や蘭に水をやり、祖父の体調悪しき折は御経の代読もしていろいろと手伝いました。十八年間に叱られたことは一度

もありませんでした。祖父は九谷焼を継ぐ兄には小さい頃から一生懸命教えていました。妹の私もその大切さを分かせていただくことがありました。それは高校三年生の時に、高松の宮様が、祖父の上絵窯と作品を見に家へ来られたことでした。天皇陛下の弟君が来られるということ、大文字町の皆様は大喜びで、岩谷父君は、私に抹茶をさし上げる作法を教えてください、新藤様は床飾り等々、何かと協力下さいました。田谷県知事様、小松市長様もお供をして御来宅され、祖父は紋付を着てかしまり、父が宮様にご説明申し上げました。町の皆様が喜ばれる様子を拝見して私は、九谷八十吉家は単に個人ではなく、小松市の公おまけのような家であり、また、一人息子で三代八十吉を継ぐ兄も大切な人だ」と心深く思いました。

昭和三十一年二月に祖父は永眠致しましたが、お正月頃私にいくつかの心得を話してくれました。その言葉を、先年祖父三十三回忌の折、恩師吉田三郎先生にお願いして、記していただきました。先生

随想

塚田 誉

(高校7回)

のすばらしい御書と共に同窓の皆様は御披露申し上げます。京都や有田に、十数代続く陶芸の御家が在ることを思えば、歴史の浅い家ですが、永久に栄える小松高校の御徳にあやかって、祖父の後継も続くようにと祈っております。

一 走る理由

走ることは苦手だった。マラソン大会でも成績は悪かった。部活動で逆水門を往復するときもやっとの思いでみんなについていった。それが今、ジョギングを趣味としているのだから自分でも不思議である。

ランニング用のシューズだけはしっかりと選んだものが、それが金もかからない。金沢に来てからは週3回ほど、夜に30分ぐらい走っている。頭が空っぽになり、口中使った分がリセットされる気分である。ストレッチして風呂に入れば、適度に疲れてよく眠れる。

しかし夜中に走っていると問題も起こる。一度だけだが、一人歩きの女性が私の姿に驚き、悲鳴を上げて逃げた。

たことがある。別に怪しい格好をしていたわけではないが、後ろからハアハア言いながら男が追いかけてきたら、確かに恐いだろう。そこで、手前の人影を見つけたらコースを変えることにしている。

また、走っているところを追いかけてきて、「見えますよ」と言われるのも辛い。私の番組を見て下さって大変有り難いのだが、落ち着いて話す状況ではない。そこで適当にお茶を濁してペースを上げることになる。

走っていると季節がそばにやってくる。風や水の音にも敏感になる。遠くの音や匂いまで分かるような気がする。誰とも競わない、気ままなジョギングは、私にとってのささやかな「禅」である。



「フグの「焼っ切り」とは取材と称してあちこちの名物料理を食べ歩くことがある。仕事であっても滅多にお目に

かかれぬ食べ物が目の前に出されたときは胸が躍る。

宮崎県的美々津という町で「フグの焼切り」という料理を頂いた。日向灘に面した港町で、下関へ向かう途中のフグがよく護れる。

フグの肝を親指の先くらい大きさに切り分け、油を引かないで直接鍋で焼く。瞬間に脂が染み出し、魚臭さとは香ばしさの入り交じった煙が広がる。中に火が通ったところで鉄刺用に切ったフグの身で包む。熱が混じり合わないうちに、もみじおろしと酢醬油につけて一口で頂く。

含んだ瞬間は身の縮まった刺身である。淡泊であり、上品である。噛み締めると一気に濃い甘みが口中に広がる。しつこくなる寸前を酢醬油が引き締める。これが地元の焼酎に実によく合う。

ご主人は漁師をしていたそうだがすでに引退しており、今は十代の息子さんが船を継いでいるとのこと。太平洋沖が仕事場で、何ヶ月も帰ってこないという。

女将さんは涙もろい人で、息子さんの話になると目を真っ赤にしていた。

今考えると、怪しげな料理である。毒も気になる。金沢ではまず食べない。

それでもこの味が忘れられず、まだ食べに行きたいと思う。フグのシーズンになると、私の頭の中には、取材を忘れて飲みながら話をしたご主人たちのことや、あのドラマチックな味の奇妙な料理が浮かんでくる。

小松同窓会新年会開催

平成八年度小松同窓会新年会は、平成九年一月三十日午後六時から、小松市本折町小松グランドホテルで開催されました。

会員、教職員二百二十一名を前に、まず徳田八十吉会長が挨拶に立たれ、平成十一年の創立百周年に向けて、より一層の協力和団結を呼びかけられました。

次いで、鈴木英章校長より挨拶を頂き、永年勤続同窓会役員の方への感謝状贈呈へ移りました。仲井雄氏(前会長)、藤田栄進氏(副会長)、八田幹也氏(副会長)、杉永信幸氏(副会長)、故宮崎榮氏(庶務)の五名の方に徳田

会長より感謝状と記念品が贈られました。

その後、会は臨時総会に移り、審議事項として会則改正の提案が為され、拍手で承認されました。また、同窓会終身会費(入会費)改正、創立百周年実行委員会組織についての報告が為されました。

宮川 恆氏(中学26回)の「乾杯」で開始された懇親会も例年どおり賑やかに和やかに進み、四校の校歌を斉唱した後、伊東清雄氏(中学31回)の音頭で万歳を三唱し、閉会しました。

第四回

富山小松同窓会開催

平成九年四月十二日(土)午後五時より、富山市の海老亭において第四回富山小松同窓会が開催された。

四月十二日(土)、十三日(日)は「とやま桜まつり」の開催日で全日本チンドンコンクールや富山市民の仮装行列パレードなどおまつりのにぎわいの中、晴天で絶好の花見びよりの同窓会であった。

来賓として、同窓会本部より徳田八十吉会長、那谷忠雄副会長、西田正彰教頭のご出

席のもとに、原谷敬吾富山小松会会長以下三十五名が参加した。

徳田同窓会会長からは同窓会本部の近況と創立百周年記念事業における熱い思いをおうかがいし、西田先生からは高校要覧や高校新聞をもとに、高校の近況や学業、文化、スポーツなどいろんな面での活躍ぶりをお聞きした。

懇親会は原谷敬吾氏(北陸経済連合会名誉会長、中学26回)の乾杯の発声で開宴し、和気あいあいの雰囲気のもと、天守台の思い出や名物先生の話、創立百周年への思いなど、先輩後輩入りまじって話はずんだ。

最後は、山本正臣氏(北陸経済研究所常務理事、高校9回)の音頭で万歳を三唱し、余韻の残る中、閉会した。

当日会場の海老亭は村満智子さん(県女34回)が女将をなされており、開催にあたっては大変ご協力をいただいた。(中学37回 牧野新一 記)

白楊会関東支部

総会便り

今年の総会は五月八日「こまはエミナス」を会場に三

十三回生のお世話で開催しました。春の嵐と言いたような風の強い日で心配しましたが、五十九名が出席され和やかに行われました。

先生方の出席が無く一寸寂しゅうございましたが、議題として「県立小松高女ここにありき」という碑を建てていただきたいと申し立てましたことに付いて、まだ具体的な案ができておりませんが市役所との間に検討中である旨の報告をさせていただきました。

会員の高齢化について、今後の運営をどうするかという問題もあり、差し迫ってどうするかということより皆様への課題として名案をお考えおき下さいと申し上げました。

お食事の後、三十四回生の中島栄美子様の独唱に三十三回生の野口美津子様が伴奏してくださり、しばし心を遊ばせて聞き惚れました。その後、楽譜を用意してくださいましたので全員で「花」「夏はきぬ」「校歌」を伴奏付きで合唱しました。一同女学校時代に返ったような若やいだ気持ちになり、楽しくまたの再会を願ってお開きになりました。

(県女27回 北山寛子 記)

過去10年間の合格状況

Table showing admission statistics for various universities from 1988 to 1997. Columns include university names and years. Rows list public and private universities like Keio, Waseda, and others.

平成9年3月卒業生の主な進学先

Table showing the main destinations for graduates in March 1997. It lists private and public universities such as Aichi University, Keio University, and others.

同窓会の開催について

各期・各ホーム等で同期会、ホーム同窓会などを実施された場合は、代表者の方よりのご一報をお待ちします。逐次、会報に掲載いたします。

その場合は実施日時、場所、参加人数、話題となった事柄など概要を簡潔にお知らせください。葉書でも結構です。

また、同期会、同窓会を予定されている場合、学校要覧（毎年の学校の現勢を記したパンフレット）を御希望により送付いたします。必要とされる場合は、あらかじめ、必要部数を同窓会本部に御連絡ください。

本部だより



同窓会報「天守台」第14号をお届けします。早いもので第1号の発行から既に6年半の歳月が経過しました。これもひとえに会員の皆様のご協力のゆえと思っております。

校創立百周年記念事業の一環として、『百年史』の刊行が計画されています。つきましては、中学・県女・市女・高校（特に昭和20年代・30年代）の各種資料（学校生活で使用した教科書類・諸行事のパンフレット・学校新聞等の印刷物、写真）をお貸し願えませんでしうか。事務局までご一報下されば、お借りに参上したいと思えます。ご家庭に埋もれている貴重な資料のお便りをお待ちしています。

◇今年度の同窓会事務局のメンバーは次の通りです。ご要望、アドバイス等何なりとお寄せ下さい。

- 吉田洋三 松田玉枝
酒井隆志 渡辺知子
村井恭子（同窓会館常勤）

第15号の原稿募集

- ◎メ切 平成9年10月31日
◎内容 自由（在学中の思い出、近況報告、趣味、紀行文、俳句、短歌等）
◎長さ 六百字程度
◎送先 同窓会事務局宛
◎発行 平成10年1月

◇来たる平成十一年の小松高